

● 九州

池田和正

九州交響楽団（福岡市）は2015年度から、定期演奏会（9回）、天神でクラシック（4回）に加えて、新たな自主公演として名曲・午後のオーケストラ（4回）をスタートさせた。いわゆる人気曲を「名曲・午後」で特集することで、定期は「芸術的挑戦の場」と明確に位置づけることが狙いで、音楽監督3年目を迎えた小泉和裕の強い意思で実現した。オーディションによる新規楽員の採用で首席奏者を含む3管編成が固まり、近現代作品が求める高度な演奏技巧に応えられるようになったという自信がうかがえる。

はたして定期で取り上げた全28曲のほぼ半数が20世紀の作品で、スクリャーピン「法悦の詩」、シェーンベルク「ペレアスとメリザンド」など11曲が楽団初演。特筆されるのは「原爆投下70年 平和への祈り」と題した7月定期で、ありがちな既存の楽曲（レイクエム等）の流用でなく、シュニトケ「長崎」、三善晃「夏の散乱」という原爆を直接題材とした作品を選んだ。下野竜也のタクトは単なる悲劇の情景描写をこえ、「戦争の本質は何か」「平和のため何をなすべきか」聴衆一人一人に考えさせるような解釈で、被爆地を抱える九州のオーケストラとしての社会的使命、音楽の可能性を強く実感させるものだった。ほかに指揮者では尾高忠明、ソリストでは小山実雅恵、川久保賜紀らが客演した。

「名曲・午後」は開演時間を土日祝日の午後2時に設定。「運命」「ボレロ」「モルダウ」などの人気曲を並べ、小林研一郎、辻井伸行ら集客力のあるアーティストが出演。初の試みとして終演後、指揮者やソリスト、楽員と聴衆が交歓する九響交流カフェも催した。ただ集客面では「名曲・午後」の入場率90%超に対し定期は70%割れと苦戦、依然人気曲の需要が高いのが実状で、次年度以降の課題だ。

このほか下野竜也指揮の松村禎三「沈黙」長崎公演（2月）、井上道義指揮・総監督／野田秀樹演出による「フィガロの結婚～庭師は見た！～」宮崎、熊本公演（11月）など、依頼公演のオペラでも存在感を発揮した。楽員有志が企画する末永の森コンサートをはじめ、扇谷泰朋（ソロ・コンサートマスター）らのリサイタル、タラス・デムチシン（クラリネット首席）らによる2管編成のベートーヴェン・シンフォニエッタの結成など楽団外での活動も目立った。

プロ・オーケストラ唯一の九州ツアーである日本フィルハーモニー交響楽団の九州公演が40周年を迎えた（2月）。1975年、経営難にあった楽団を応援しようと、各県の民放労組が中心となって始めたもので、現在は10都市の実行委員会が連携し、赤字会場の損失を黒字会場の利益で補填する方法で運営している。節目の公演では楽団の桂冠名誉指揮者、小林研一郎がベルリオーズ「幻想交響曲」など入魂のタクトを披露したが、近年は実行委員会メンバーの高齢化や入場率の低下など課題も抱えている。

戦後70年関連では、長崎県オペラ協会が原爆を題材に2013年に制作したオペラ「いのち」（錦かよ子作曲）を長崎で再演（9月）。東京・新国立劇場の地域招聘公演としても上演された（7

月）。被爆者に取材したメモから星出豊が構想した物語の結末は、愛の勝利の大団円を予感する鑑賞者に非情な現実を突きつけ、被爆死した一人一人の生命について問いかけた。管弦楽を担った地元のOMURA室内合奏団も好演。5月には楽団単独での東京公演もっており、小編成ながら九響に次ぐプロ・オーケストラとして成長が著しい。

音楽祭では、宮崎国際音楽祭が第20回を迎えた（4月29～5月17日）。宮崎県立芸術劇場の活用策として1996年、県などの主催で室内楽音楽祭として始まり、第1～6回にはヴァイオリニストのアイザック・スターン、第9～15回には芸術監督として指揮者シャルル・デュトワを招聘。第16回からは、第1回から総合プロデューサーを務めた徳永二男が音楽監督に就いた。かつてはミュージック・アカデミーの受講生を県外出身者が独占したことから、「地元に着していない」との批判も受けたが、近年は受講生の地元枠を設け、地元合唱団やジュニアオーケストラも出演するなど県民参加が定着。高い芸術性と教育プログラムを併せ持つ、国内を代表する音楽祭に成長した。広上淳一が指揮した20周年記念ガラ・コンサートでは、ピンカス・ズーカーマン、ミッシェル・マイスキー、ジュリアン・ラクリン、諏訪内晶子らが一堂に会し、徳永ら国内の名手ずつくるオーケストラと、バッハやベートーヴェン、シベリウスらの協奏曲を披露した。

第17回別府アルゲリッチ音楽祭（5月9～18日）の期間中には、音楽祭を支援してきた篤志家の寄付により、別府市内の県有地に小ホールを備えた「しいきアルゲリッチハウス」が竣工した。講習会や演奏会を通年で行う文化の発信拠点として期待されるが、音楽祭を運営する財団は、新たに生じる管理維持費をどう工面するかという大きな課題に直面している。運営を圧迫するハコモノにならないよう、行政を交えた対応が望まれる。

第36回霧島国際音楽祭（7月15～8月2日）では、音楽監督の堤剛によるバッハ「無伴奏チェロ組曲」全曲演奏や、エリソ・ヴィルサラゼのリサイタルが話題に。北九州国際音楽祭（10月17～11月21日）では、地元出身の篠崎史紀らベテランと若手によるオーケストラが編成された。新・福岡古楽音楽祭2015（10月23～25日）は「イタリアン・バロックの栄華」と題し、ヴィヴァルディの室内楽や協奏曲などを取り上げた。

公共ホールでは、iichiko総合文化センター（大分市）が、東京二期会やびわ湖ホールなどとの共催で、「リゴレット」（2月）、「オテロ」（3月）を上演。地方都市では極めて珍しい本格的なオペラ鑑賞の機会となった。アクロス福岡（福岡市）は、地元出身の安永徹と九州交響楽団の出演による開館20周年パースデーコンサート（4月）、響ホール（北九州市）は地元の響ホール室内合奏団などの出演で室内楽フェスティバル（6月）を企画した。宗像ユリックス（福岡県宗像市）を本拠地とする九州管楽合奏団は、オランダの作曲家ヨハン・デ・メイを首席客演指揮者に招請、韓国での音楽祭に参加したほか初の鹿児島公演も行った。

地元ゆかりの演奏家や作品を再評価する試みも。戦前日本やフランスで活躍した福岡出身のソプラノ荻野綾子（1898～1944年）を追憶する演奏会が福岡市で催され、山田耕作「からたちの花」などゆかりの歌曲が披露された（3月）。團伊玖磨（1924～2001年）が佐賀・唐津市制50周年を記念して作曲しながら、その後33年にわたり演奏機会に恵まれなかった合唱組曲「唐津」が、福岡日本フィル協会合唱団により、作詞家栗原一登の故郷・福岡県八女市で全曲初演された（5月）。